



TITLE:

アダム・スミスの価値論

AUTHOR(S):

岸本, 誠二郎

CITATION:

岸本, 誠二郎. アダム・スミスの価値論. 経済論叢 1949, 64(4-6): 209-237

ISSUE DATE:

1949-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/132183>

RIGHT:

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十四卷 第四・五・六號

京都大學經濟學部創立三十周年

記念論文集

第二集

- アダム・スミスの價值論……………岸本誠二郎
- カレツキーの『獨占度』と分配機構……………島津亮二
- 原價計算法の理論的性格……………岡部利良
- 第一次大戰後の外資輸入……………堀江保藏
- 初期獨占……………堀江英一
- 財閥考……………靜田均
- 跋文

昭和二十四年十二月

アダム・スミスの價值論

岸 本 誠 二 郎

一、『國富論』に於ける價值論の位置

價值論は經濟學の基礎理論であり、一定の普遍性を有するものであるが、實際には經驗の歴史性に制約されて歴史的性質を有する。これはアダム・スミスの價值論の如き古い價值論を扱う場合に特に注意しなければならぬ點である。價值論は基礎理論であるとはいへ、一定の歴史的前提を有するから、スミスが當然のことと考へて推論したことも、今日の吾々にとつては必ずしも然らざることがあり得るからである。

ところでスミスは中世の封建制が崩壊して英國に於ける近代資本主義經濟が漸く形成されんとする時代に立つていた。一七六〇年の英國はなお相當に細かな雜多の中世的の產業的取締りのもとにあつた。その制度は事實上衰微しつつあつたが、未だそれは產業自由の近代的原則によつて代位せられるに至らなかつた。中世に於ては國家は人間生活の全體を包含する目的をもつた宗教的團體であると考えられ、あらゆる點で個人を監督し保護するものであつた。もとより國家は法定利率、公正なる賃金及び確實なる商品を確保するものであり、人間生活に重要なことは偶然の機會や利己心の解決に放任せらるべきではなかつた。この國家思想とそれより生じた取締及び制限政策は、

アダム・スミスが『國富論』を書いた時代にもなお英國産業に人なる影響を與えていた。實際、國內商業は大いに自由であり、同時代のフランスやプロンヤに於けるような地方的關稅障壁は存在しなかつた。しかも勞働及び資本に對しては依然として制限の網が存在していた。徒弟法もある程度制限せられるようになったが、それでも廣汎に實施されていた。組合は商品の價格と品質とを監督していた。スミスが組合に對して強く非難した當時に於て、バーミンガムやマンチエスターは既に自由都市として繁榮していたが、グラスゴーでは組合の制約が強く行われていた。

治安判事による賃金の制定も、中世主義の遺物として行われていた。勞働者の團結も法律によつて禁止されていた。

外國貿易については取締りは嚴重であつた。貿易は特許會社によつて營まれていた。*

* A. Toynbee, *Lectures on the Industrial Revolution of the eighteenth Century in England*, 1884, pp. 51—54.

中世のこの封建的諸規制はスミスの時代には漸く崩壊しつつあつた。尤も保護主義的規制から自由と競争への變化を重要視し、これを以て直ちに産業革命の主要特質となすことはできない。これは結果を原因と誤解し、經濟事實の法的側面を事實そのものと誤るものである。古い法律の制約を破つたのは新しい産業組織と産業方法であつたのである。*

* P. Mantoux, *The Industrial Revolution in the eighteenth Century*, 1929, pp. 84—85.

それはともかくとしてスミスの經濟學はこの變化に則應し、これを推進せしめる意義を有した。従つてその基礎理論である勞働價值學說も一定の歴史的性格を有するものであつた。この點は重要であつて、スミス以後の勞働價

值學說の發展を見る場合にも、抽象的に理論の變化の筋を見ただけでは十分に理解し得ず、その歴史的意義より把握しなければならぬ。この意味に於て勞働價值學說の發展に二つの段階を分つのは重要である。即ち前段は古典學派の價值學說であり、後段はマルクスの價值學說である。これは理論の精粗の進化の段階でなく、兩者は同じ勞働價值學說であつても前者は資本主義の成立・興隆期のものであり、後者はその矛盾期のものである。或は前者は資本家的のものであり、後者は勞働者的のものである。これはスミスの勞働價值學說を扱う場合の重要な觀點となるものである。

そこでスミスの價值論についてまず注意しなければならぬのは、『國富論』のうちに於て價值論の扱われている位置である。『國富論』にはその最初に本書の説明の構造が述べられているが、それによると各國民の年々の勞働がその國民の年々の消費の源となること、並にそれとそれを消費する人口數の多少如何によつて、物資の供給の多少がきまるということが研究の焦點とされている。ここには勞働による生産とその結果を國民の間に分配する問題があり、生産と分配の關係の規定が重要となるが、價值論はこの兩者を縫いつけるところの交換の基礎理論と考えられ、それ以上富の生産の基礎すけは顧みられていない。

實際、スミス經濟學は價值論より説き起されているのではなく、分業、市場、貨幣、價值の順序で展開されている。もとよりすべての國民の年々の勞働は元來その國民が年々消費するところの生活の必需品と便利品を供給する元本であるという思想は、勞働價值學說の基礎をなすものであるが、スミスが重要視したのはこの勞働を封建的束縛から脱せしめることであつた。^{*}勞働の價值的性質を立入つて規定するならば、分配の矛盾が明かにされるが、スミスの段階ではそれは未だ顯著な重要問題でなく、所謂富の生産が、分配と分離された形で、重要と考えられたので

ある。かかる生産がふえさえるならばすべての問題は解決されると考えられた。實際は勞働價值學說をとりながら、これをこれ以上に深めなかつたのは、その必要がなかつたからである。スミスの立つ歴史段階では、スミスの價值論は不完全であつたというよりも、寧ろそれだけで必要にして十分なる理論であつたのである。

* Cf. E. Cannan, *A History of the Theories of Production and Distribution*, 3rd ed. 1924, p. 43.

スミスの價值論の問題提起は、市場、貨幣の説明につづき、財貨を貨幣または他の財貨と交換するについて人々が自然に守るところの法則は如何なるものであるかということの研究しなければならぬが、これらの法則は財貨の相對價值または交換價值と呼ばれるものを決定するもので、これが價值論研究としてとり上げられたのである。*この交換の法則は價值論の端緒となるもので、價值論はそれ以上に生産並に分配の内部關係を規定する法則を内容とするが、スミスに於ては價值論はそこまでは滲透せず、また滲透する必要もなかつたのである。

* A. Smith, *The Wealth of Nations*, Cannan's ed. Vol. I, p. 30, 大内譯(一)、六四頁。

二、價值の基本的規定

さてスミスは價值論の研究を使用價值と交換價值の對立より出發せしめた。彼によれば交換價值の大小は必ずしも使用價值の大小に比例しない。水の如く使用價值大なるもの必ずしも交換價值大ならず、ダイヤモンドの如く使用價值は極めて小でも、交換價值大なるものもある。このためにスミスは交換價值の量的規定から使用價值を斥けた。

水とダイヤモンドの價值矛盾はスミス以前に於ても既にロック、ハチスン、ロー及びハリス等によつて指摘され

ていたところであるが、スミスはこれを單純に踏襲したのでなく、それによつて暗示されたではあるが、それ以上に彼の實證的經驗に基いて扱つたのである。

スミスの使用價值と交換價值の矛盾についての説明は、後にオーストリヤ學派から批判された。即ちオーストリヤ學派によれば、この場合重要なのは抽象的にある財貨の效用或は使用價值が大であるか小であるかということではなく、具體的に一定量の財貨によつて欲望を満すことである。一定の欲望を一定財貨の一定量づつで順次満すならば、財貨の效用は遞減し、所謂效用遞減の法則が作用する。そこで財貨の效用の大小は財貨一般について問題にしろることではなく、欲望充足にあてられる財貨量如何によつて異なるのである。スミスはこの點を看過したといふのであつた。

スミスがオーストリヤ學派の意味に於ける財貨數量を問題にしなかつたのには歴史的理由があつたと思う。即ちスミスに於ては吾々の欲望を満す財貨を生産することが當時の社會として重要であつて、それと切離して抽象的に與えられた財貨量と欲望の關係を規定することは意味のないことであつたのである。中世末期に於て社會の生産力は衰え、まず財貨を生産することが解決されなければならぬ問題であつて、それと引離しての經濟上の價值問題はない。オーストリヤ學派の時代の如く、資本主義經濟が瀾熟し、市場に財貨が溢れ、財貨を生産と切離して扱ひうる條件は存在しなかつた。スミスに於て使用價值を論ずるのに財貨數量を無視したことは、抽象的觀念的なりと非難さるべきことでなく、水やダイヤモンドの例によつて使用價值を説明したそのことが具體的實證的であつたのである。個々の財貨がばらばらに扱われず、分業的生産と市場を通じ商品世界を構成するものと考えられ、そこにスミスは價值法則としての統一原理を求めんとしたのでから、この規定は歴史的に最も具體的であつたのである。

ダグラスはスミスが使用價值を交換價值の説明から斥けた一つの理由として、彼の道徳的感覚をあげている。即ち虚飾を罪惡として反對する彼の節約的なスコットランドの慣習により、彼はダイヤモンドは殆ど何等の使用價值をもたずと結論した、というのである。^{*}これは一つの解釋にとどまるが、興味深いごく自然な解釋である。ここには封建貴族的觀念から近代市民的觀念への變化が使用價值判斷の逆轉に反映せしめられてゐる。

^{*} P.H. Douglas, Smith's Theory of Value and Distribution (Adam Smith, 1776—1926, by J.M. Clark etc. 1928) p. 80.

使用價值を交換價值の説明から除くと、價值は勞働によつて決定する。もとよりこの規定には財貨の生産ということが前提となつてゐる。スミスの言葉では次のように説明されている。

「ある商品の價值は、それを所有し、しかもそれをみずから使用しまたは消費しようとは思わず、それを以て他の商品と交換せんことを欲する人にとつては、その商品が彼をして購入せしめ、または支配せしめるところの勞働の量に等しい。それ故に勞働はあらゆる商品の交換價值の尺度である。

「すべての物の眞實價格、即ちすべての物がそれを獲んとする人をしてそのために眞實に支拂わしめるところのものは、それを得るための骨折と苦勞である。すべての物は、それを獲てそれを賣却し、またはそれを他の物と交換する人にとつて、眞實にどれだけの價があるかといへば、それはそれによつて彼がみずから省くことができる骨折と苦勞であり、またそれが他人に課することができる骨折と苦勞である。貨幣または財貨をもつて物を買うとき、それは勞働をもつて買うのであつて、それはあたかも吾々が物を獲得するのは自己の肉體の骨折によるのと同じことである。その貨幣またはその財貨は實に吾々にこの骨折を省いてくれる。蓋しそれには一定量の勞働の價值が含まれておるので、吾々はこの時同量の價值を含むと考えられる物と交換するのである。かくして勞働は最初の價格であつた、あらゆる物に對して拂われるところの本源の購買貨幣であつた。世界におけるあらゆる富が始めて買わ

れたのは、金または銀を以てではなくして、労働をもつてであつた。それ故この富を所有し、それを新しい生産物と交換しようとする人々にとつて、この価値はそれが彼をして購買しまたは支配し得せしめるところの労働の量に正確に等しいのである。」

「労働はあらゆる商品の交換価値の眞實の尺度である。……」

「労働のみはそれ自身の価値において不變であつて、そのみはあらゆる商品があらゆる時代とあらゆる場所において、測定され比較されるところの、究極の且つ眞實の標準である。労働はこれらの眞實価格であつて、貨幣はただこれらの名目価格である。」

「労働は価値の唯一の一般的尺度であり、また同時にその唯一の正確な尺度であることは明かである。言いかえればそれは吾々があらゆる時とあらゆる處において、諸種の物品の価値を比較しうるところの唯一の標準である。諸種の物品の眞實価値は世紀から世紀を通じて、これに對して支拂われる銀の量によつて測ることはできない。……また吾々は年々においても穀物の量によつてそれを測ることもできない。しかるに労働の量をもつてすれば、世紀から世紀を通じて、また年々においても非常に正確にこれを測ることができるのである。*」

* A. Smith, *The Wealth of Nations*, Cannan's ed. Vol. I. p. 32 et seq. 大内譯(一)、六七頁以下。

ここに価値を決定する労働はます「それを得るための骨折と苦勞」であるという。これは物を生産するに費された労働、即ち所謂投下労働を意味するが、それは交換によつて「彼がみずから省くことができる骨折と苦勞であり、またそれが他人に課することができる骨折と苦勞である。」あるものをつくるについての骨折と苦勞は、自分の費すものと他人の費すものとは必ずしも同一ではなく、労働生産力が同一なる場合にのみ同一である。ここではこのよ

うな場合が前提されている。貨幣で物を買うことは、それによつて吾々が物を獲得するに要する骨折と苦勞を省いてくれるが、それは貨幣に一定量の勞働の價值が含まれているからである。勞働は最初の價格であり、本源的の購買貨幣であるというのである。

他人の勞働についてはなお不明な點がある。即ちスミスに於てはそれが他人の投下した勞働量であるという場合だけでなく、交換に於て支配される勞働を意味している場合がある。後者はある商品の價值がその所有者をして「購入せしめ、または支配せしめるところの勞働の量に等しい」という場合である。これは交換を通じて支配せしめる勞働で、交換財貨或は貨幣によつて買われる勞働力であり、寧ろ勞働力を買取る賃金を意味する。この點は後に説明する價值分解説と關連する。

スミスの説明では價值の源泉と尺度の區別が明確でない。價值の尺度に重點がおかれているが、價值の源泉が勞働にあることは豫定されていると思われる。従つてそこには價值の源泉となる勞働についての一定の質が豫想されていなければならない。その勞働はまず個人的勞働でなく社會的勞働が考えられていたであらう。蓋しスミスは最初から分業的生產から出發し、社會的に連絡のある勞働を考えていた。價值論の初めに於ても、前述の如く、「ある商品の價值は、それを所有し、しかもそれをみずから使用しまたは消費しようとは思わず、それを以て他の商品と交換することを欲する人にとつては」云々と述べ、商品の社會性を注意している。また商品價值を決定する勞働について、みずからの費す骨折及び苦勞とみずからの骨折及び苦勞を免れるために他人に課する骨折及び苦勞とが同一に考えられているのも、自他の勞働が代替しうる社會的なものとして理解されていたことを示すものといえよう。

しかし價值をつくる勞働と使用價值をつくる勞働との區別が明確でなく、使用價值、富の増加が價值の増加と混

同されているために、分業的生産關係に結びつく社會的勞働は、價值をつくるところの社會的に一般的な勞働でなく、種々なる使用價值をつくるところの社會的に差異ある勞働であつた。スミスに於ける社會的勞働のこの理解は、いかにも不完全のようであるが、スミスの歴史段階に於てはこれで十分であつたのである。蓋し資本主義經濟が漸く形成されんとした當時に於ては使用價值、富の増加と價值の形成及び實現の間には矛盾は生ぜず、使用價值の増加と價值の増加を平行的調和的に考えてよかつた。従つて差異ある使用價值生産勞働の基底に一般的なる價值生産勞働の存在することを明確にする必要がなかつたのである。

しかしスミスは一般的なる價值生産勞働の基礎すけの餘地あることを否定したわけではなく、また現實の經濟發展がやがてこの認識を必要とすることを無視したわけでもない。寧ろスミスは當初から社會的一般勞働の觀念を有していたが、これがごく一般的なる思想にとどまり、具體的な理論として展開されなかつたまでであつた。スミス經濟學も啓蒙期の他の思想家たちと同様に、自由にして平等なる近代的人間像より出發した。彼の分業論は一つの人間論である。そこに於て彼の論ずるところによると、種々の人間の自然の才能の差異は、實際には吾々が知つてゐるところよりは小さいものである。種々の職業の人が壯年期に達したとき、差異の現われる所以は、その特異の天分のおかげであるように見えるけれども、多くの場合、この天分の差は分業の原因ではなくして、むしろその結果である。非常に異つた人間の差、例えばその邊の人足と學者の差の如きも、自然の性質よりは習慣や慣行や教育に基ずくところが多いと思われる。彼等がこの世に生れてきたときも、またこの世に生存した最初の六七年も、恐らく相互によく似寄つたものであつて、両親でも遊び友達でも彼等の間に非常に著しい差異を見ることができないであらう。この頃またはその後間もなく、彼等は異つた職業につくのである。この時になつて才能の違いが現われ

はじめ、その程度が順次高まるのである。そして遂には學者はその虚榮心にもとずいて何らかの相似さえ仲々認めないようにならるのである、と考えられた。*

* Smith, op. cit. pp. 17-18, 大内譯(二)、四二一四三頁。

ここにスミスは人間は元來自然的には平等で、種々な差異を生ずるのは慣習や教育の結果であると考えた。従つてこのような人間像を基盤とする労働は元來社會的一般労働であり、これが社會的に差異ある労働に發展するといわなければならぬ。そしてこの發展の契機となるものは交換であるとスミスは考えたようである。

スミスは分業論に於て、分業の發生する原因はその利益を豫見する人智にあるのでなく、人間の性質の一特徴をなすところの交換によるとなした。封鎖されない解放されたる近代的人間像に於て、交換が人間性質の一特質であるスミスが考へたのは極めて自然であるが、この交換は差別化と平均化の互に矛盾する二職能をもたしめられている。

さきにスミスの言葉を引用したように、人間は元來自然的には平等で、成長するに従い、習慣や教育によつて差別を生ずるが、これは交換する人間性質によつて媒介されるからである。交換が行われず、人間が各々自給自足の活動を営むならば、差異は生じない筈である。「すべての人が同じ義務を果し同じ仕事をしなければならぬとするならば、業務の差が才能の上に非常な差異を生ぜしめることはあり得ないであらう」というのである。人間は元來平等で差異のないものであるが、その人間のもつ交換する性向が、人間に差異を生ぜしめる契機となるというのである。

しかるに交換を媒介として使用價值生産労働に、或は労働生産力に差異を生ずるが、そうなると交換に於ける商

品價値の置替えに基準となるものが問題となる。即ち、勞働は價値の源泉であるばかりでなく、價値尺度として質的に均一であり、量的に比較しうるものでなければならぬ。かかる價値尺度の形成も交換によつて果されるのである。スミスの言葉でいうと、次のようである。

「勞働はあらゆる商品の交換價値の眞の尺度ではあるが、その價値が普通に測られるのはそれによつてではない。二つの異つた量の勞働の比を確定することは、しばしば困難である。二つの異つた仕事に費される時間のみでは、必ずしもこの比を定めることはできない。そのために忍んだ困難の程度並にそのために用いられた工夫の大小もまた同様に計算に入れなければならない。一時間の困難なる作業は二時間のやさしい仕事よりも、より多くの勞働を含んでいることがある。またそれを習得するのに十年の勞働を必要とする職業においての一時間の勤務は、普通の簡明なる業務の一ヶ月の勤勉よりも、より多くの勞働を含むことがある。しかしながら困難や工夫というものの正確なる尺度を發見することは容易なことではない。種類の異つた勞働の生産物を相互に交換するに際しては、通例これら兩者に對して多少の斟酌を加える。けれどもそれは正確なる尺度によつてなされるものではなくして、市場の折衝によつてなされるものであつて、大體の公平が得られればよいので、たとえ正確ではなくとも日常生活の仕事をやつてゆくには、それで差支えがないのである、」と。*

* Smith, op. cit. p. 33, 大内譯(一)、六九—七〇頁。

この場合交換は異質的なものを均等化する働きを有する。近代的人間の成立により社會的に一般的なるものが形成されるが、かかる人間の有するところの交換する性向は、分業を促して個々の異質的なものを形成するけれども、これは非社會的なものを形成するのではなく、交換は却つてそれを交流せしめる。このことは近代的人間の基本的性

格たる社會的一般的なものが、勞働によつてみずから買っていることを示す。

異質的な勞働生産物の交換には市場の折衝によつておのずから一定の價值尺度が生ずるというスミスの見解は、後のリカアドやマルクスの類似の見解と同様に、今日非難されるところである。例えばダグラスによると、この場合スミスは勞働によつて市場價值を説明するのではなく、反對に勞働量を説明するのに市場價值に訴えているというのである。^{*}成程スミスの言葉では交換、即ち需要供給の反復が落着いたところで、勞働量の比率を確かめる如くであるが、交換は媒介となるにとどまり、その基底に於て價值形成の生産行程が社會過程として進行し、この過程のうちに人間勞働の異質的分化と異質勞働の等質化えの還元が行われることを看過してはならぬ。ここに勞働價值説の重要な一主張があり、この點はスミスに於ても十分に理解されていたところである。單なる交換、需要供給で問題を解決せんとするならば、價值論はなくなつてしまふであらう。

^{*} Douglas, op.cit. pp. 81—82.

三、價值の量的規定

スミスは價值の量的規定、價值尺度の問題を詳論する。彼によれば、勞働はあらゆる商品の交換價值の眞の尺度ではあるが、價值は普通に直接に勞働によつて測られない。またあらゆる商品は直接に勞働と交換されることによつてそれと比較されるよりも、よりしばしばその他の商品と交換されることによつてそれと比較される。それ故にその交換價值はそれをもつて購入し得る勞働の量をもつて測られずして、それ以外の物品の量によつて測られるのむしろ自然である。大部分の人々にもまた特定の商品のある量の方が勞働の一定量というよりは、その意味がわ

かり易いに相違ない。前者は平明な觸知し得べき物品であるが、後者は一種の抽象的概念であつて、たとえそれを如何に分り易く説明しても前者ほど自然な明白なものではないからである。*

* A. Smith, op. cit. Bk. I, Chap. V. p. 32 et seq. 大内譯(一)、六七頁以下。

しかしスミスによると、物々交換がやんで、貨幣が商業の一般用具となると、あらゆる特定の商品は他の商品と交換されないで、それよりはよりしばしば貨幣と交換せられる。かくしてすべての商品の交換價值は労働の量またはそれと交換において得られるところの他の商品の量によつて測られないで、それよりはよりしばしば貨幣の量によつて測ることが普通に行われるようになるのである。

しかしながら他の一切の商品と同様に金銀もその價值を變じ、ある時は安く、ある時は高く、またある時は買うことがやさしく、ある時は困難である。従つてスミスによると金銀のようにそれ自身の價值が絶えず變化する商品は、他の商品の價值の正確な尺度とならない。しかるに労働の相等しい量はいつ如何なところにおいても労働者にとつては相等しき價值をもつといえるであらう。それ故にただ労働のみはそれ自身の價值において不變であつて、それのみはあらゆる商品があらゆる時代あらゆる場所において、測定され、比較されるところの究極のそして眞實の標準である。労働がこれらのものの眞實價格であつて、貨幣はただこれらのものの名目價格であるとスミスは考へた。

ここにスミスは價值尺度を求めて労働と貨幣とを比較した。究極の價值尺度は抽象的な労働であつて、現實の具體的な尺度となるのは金銀貨幣である。しかし金銀も他の商品と同様にその價值を變ずるから、正確な價值尺度とならないというが、そうではない。貨幣價值が變化すると、諸商品の價格は一様に騰貴し或は下落するが、それに

よつて諸商品の相互の價值關係が變化するものではない。價值の不變なる商品は存在しないが、それだからといって、金銀貨幣が正確な價值尺度とならないということもあり得ない。

價值尺度として勞働は「一種の抽象概念」でわかりにくいので、「平明な觸知し得べき物品」で測ることをスミスは求める。そのために彼は更に金銀貨幣と穀物とを問題とする。そして彼は價值尺度としての金銀貨幣と穀物の長短を地代と賃金の價值について検討する。

スミスによればまず永代地代を留保し、それをつねに同一價值のものたらしめんと欲する場合に、この地代を一定の貨幣額で定めるならば、その價值は異つた二種の變動に會う熟れがある。その第一は同じ名目の鑄貨の内に含まれている金銀の量が時代によつて變ることから生ずる變動であり、第二は金及び銀の同一量が時代が變ればその價值が變ることから生ずる變動である。これに反し、穀物で留保せられる地代は、鑄貨の名目に變化がなかつた場合でも、貨幣で留保されるより遙かによくその價值を保持することができた。それ故に久しい時間をへだてて見れば、穀物の同一量は他のものよりも、より正確に同一の眞實價值を表わすとスミスは考えた。

しかしながら穀物地代の眞實價值は貨幣地代のそれに比して、世紀世紀を通じて變動することはより少ないけれども、年々においてはより激しい。勞働の貨幣價格は穀物の貨幣價格に應じて年々に變動するものではなくして、いずれのところにおいても生活必需品の時々の、または一時的の價格ではなく、その平均のまたは普通の價格に適應するものと思われた。

スミスによれば銀の價值は世紀世紀を通じては大いに變動しても、その年々の變動は殆どない。いな半世紀または一世紀もの間不變または不變に近いことも多い。そこで穀物の普通または平均の貨幣價值もこういう長い期間、

同一または同一に近く維持されるのである。そして少くともその社會がつづき、他の點に於て事情が同一または同一に近いかぎりには、それとともに勞働の貨幣價格もまた不變である。しかしこの間、穀物の時々または一時的の價格は二倍になることがあるという。

金銀貨幣と穀物の價值についてのスミスの以上の説明には混亂があるようである。穀物の價值は年々については變動が著しいが、幾世紀にも互つて見ると變動が少くないと考へていようである。しかし穀物が一年のうちの收穫期、端境期などで變動するのは需要供給關係の變化によるその價格であつて價值ではない。幾世紀の永きに互つて見ると、穀物は耕作方法の改善等により金銀よりも却つて價值の變化が大であるとも考へられる。金銀は總じて穀物よりもその價值の變化が少くないといえよう。スミスは貨幣の價值の變化の激しい一理由として、同一の名目の鑄貨の含む金屬量の變化といふことをあげているが、これは金銀の價值變化でなく、價格の標準の變化である。このために生ずる價格の一般的騰貴は鑄貨の價值下落であり、諸商品相互の價值關係には變化はない。従つてかかる場合には地代等の價值保持には貨幣以外の商品であれば、穀物に限らず、何れの商品でも等しく有效である。

それにしても勞働は價值の唯一の一般的尺度であり、また同時にその唯一の正確な尺度であることをスミスは認める。言いかえればそれは吾々があらゆる時あらゆる處において、諸種の商品の價值を比較しうるところの唯一の標準である。スミスによれば諸種の商品の眞實價值は世紀から世紀を通じて、これに對して支拂われる銀の量によつて測ることはできない。また吾々は年々においても穀物の量によつてそれを測ることもできない。しかるに勞働の量をもつてすれば、吾々は世紀から世紀を通じて、また年々においても非常に正確にこれを測ることができるのである。世紀から世紀を通じては穀物は銀よりもよい尺度である。蓋し世紀から世紀を通じては穀物の同一量は

銀の同一量よりも勞働の同一量を支配し得るにより近いからである。これに反して年々についていえば、銀は穀物よりもよい尺度である。蓋しその同一量はより正確に勞働の同一量を支配するからであると考へられた。

しかしスミスによれば同時同場所においては、あらゆる商品の眞實價格と名目價格とは相互に正確に比例するものである。例えばロンドンの市場において、諸君がある物品を提供して得る貨幣が一定の増減をなすならば、その貨幣はこの時この場所において諸君をしてそれに應じて一定の勞働を購ひ、または支配することを得せしめるであらう。それ故に同じ時間同じ場所において貨幣はあらゆる商品の眞實の交換價值の正確なる尺度であるとされている。しかしながらそれはただ同じ時間同じ場所に限つての話である。

しかるに時と所とを異にする勞働の時價はこれを正確に知することは到底できない。ただ穀物の時價はたとえ規則的に記録されているところは極めて少ないとはいへ、一般によりよく知られていて、よりしばしば歴史家その他著述家の注意するところとなつてゐる。それ故に一般的には吾々はこれをもつて満足するしかない。というのはこれが勞働の時價につねに正確に比例するというわけでもないが、それに比例するものとして吾々のもちうる最も近似的なものであるからだと考へられた。

スミスは以上のように穀物が幾世紀もの永きに互つて價值尺度として適當であるというが、それは上述の如く必ずしも正しくない。また金銀は年々の價值尺度としてはよいが幾世紀をも通じては不適格であるというが、同一名目の鑄貨の含む金屬量の變化、即ち價格の標準の變化や、金銀の生産技術の改善或は豊富なる新鑛脈の開發等により貨幣價值が低落し物價が騰貴しても、これは諸商品の價格に一樣に現われるところで、各時點に於ける諸商品相互の價值關係には少しの變化もなく、價值尺度として少しも不適格ではない。

四、價值分解論

商品價值は元來それを生産するに必要な勞働量によつて定まるが、資本主義社會に於ては勞働力、資本及び土地の三生産要因はそれぞれ勞働者、資本家及び地主に分有されているから、資本家的企業者を主軸としてこれらの要因が結合され、生産が行われたる結果の商品價值は、企業者とこれらの生産要因所有者の間に分配されなければならぬ。そこでこの點から考えると價值問題は勞働による價值形成問題と分配に於ける價值分解問題の二面を有する。スミスはこの問題を『國富論』の第一篇第六章で扱つたが、その解決は容易でなかつた。まづスミス自身の説明から見よう。

彼によると、資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社會に於ては、種々の物品を得るために必要とせられる勞働量の間の割合は、これらの物品を相互に交換するための何等かの規則を與えうる唯一の事情であつたと思われるといふ。例えば狩獵民族の間で一頭の海狸を殺すには二頭の鹿を殺すだけの勞働が通常必要であるとするならば、一頭の海狸は當然に二頭の鹿と交換されるであらう。或はそれは二頭の鹿の値あるものとされるであらう。その生産に通常二日の、または二時間の勞働を要するものは、その生産に通例一日の、または一時間の勞働を要するものの二倍の値をもつことは自然である。もとよりかかる場合にある種の勞働が他の種の勞働に比して激しいとか、或はより多くの技巧と工夫を要するならば、それ相應の斟酌が價值に加えられるであらう。が、いずれにしてもかくの如き事情のもとに於ては、勞働の全生産物は勞働者に屬する。そしてある商品の獲得または生産に普通に要する勞働の量は、通例その商品をもつて購ひ、支配し、またはそれと交換せられる勞働の量を律し得る唯一の事情で

あると考へられた。*

* A. Smith, op. cit. pp. 49—50, 大内譯(一)、100—101頁。

一體スミスの價值論は主として第一篇第五章に説かれてゐるのであるが、それは大體に於て價值尺度並に貨幣價值の説明である。價值の源泉或は實體の説明はこのうちにはあまりないが、しかし當然に前提されてゐると考へなければならぬ。第一、第二章の分業を中心とした生産論は、價值と富とを混同してゐるが、ある程度價值源泉の説明の意味を有する。分業に於ける勞働は國民が年々消費するところの富或は商品價值を生産するのであり、云わば價值の源泉或は實體と考へられた。そして勞働が富或は價值の源泉として單純に認識されるには、勞働を縛りつけてゐる封建的制約を除いて自由なる社會を實現する必要があつた。

この點は經驗科學としての經濟學に於て微妙な認識上の問題となる。即ちスミスは價值論を説くに當つて、この問題は難かしく説明には大いに努力し、明晰を期するためには冗漫に流れることも辭せず、讀者も特に忍耐と注意とをもつて讀んでほしいが、しかも價值論の性質上非常に抽象的であるので、幾分か曖昧な點も残るかもしれないと斷つてゐる。*このように勞働價值は理解しにくい抽象であるが、しかしそれは單純に形而上學的な構想ではない。既にスミスの歴史段階に於ては中世封建的諸制約を脱して近代社會が形成されつつあり、勞働價值の觀念も現に一般的なる、或はやがて一般的ならんとするところの經驗として得られていたのである。漸く一般的なものとして形成されんとしたものであるから、スミスの鋭い理性によつて世人の理解を導くことが必要であり、しかもそれが仲々分りにくい説明ともなつたのである。ウイザーはスミスのこの理論を「經驗的」に對して「哲學的」理論と評したが、*これは餘りにも形式的な解釋であり、むしろスミスの價值論を誤解するものである。スミスのこの理論は

抽象的ではあるが、これも一つの經驗的の基盤を有するものである。

* A. Smith, op. cit. pp. 30—31, 大内譯(一)、六六頁。

** F. v. Wieser, Der natürliche Wert, 1889, Vorwort.

しかしこの理論は「哲學的」と云われるほどに、現實をそのままに説明するものでないことはスミスも十分に承知していた。この理論は初期未開の社會に於てはそのまま妥當するとも述べられた。ここに初期未開の社會を持出したのは、この理論がそのまま吾々の現實を説明するものでないことを物語るばかりでなく、封建的諸制約によつて妨げられない以前の原始社會が、自由なる社會として勞働價値の原則をそのまま實現するという啓蒙思想家としての彼の特色を示すものであらう。しかも漸く一般的となりつつあつた勞働價値の經驗的認識は、スミスの鋭い理性によつて初めて取上げられたものであるが、彼は更に封建的殘滓を排除き、近代社會の形成を推進せしめることにより、勞働價値の認識を益々具體的現實的ならしめるばかりでなく、所謂國富を増進せしめることもなると考えたのである。

ここに注意しておきたいのは、スミスは啓蒙思想家として自由なる社會を理想として觀念的に構想していたという事は、彼が單純な理想主義者であつたという意味でないことである。自由の理想と云つても、それは當時の社會が實踐的に必要なるものとして浮び上らせたもので、空想的に作り上げられたものではない。個々の問題解決に當り封建的制約を排除く必要に迫られ、それが原理化されて自由の理想ができ上つたものと考えなければならぬ。例えば最も重大問題である勞働の解放にしても、スミスはただ觀念的に勞働の解放を期待してゐたのではなく、それが結局雇主にとつても利益であり、當然にそうなるべきであつたから、期待されたのである。「多くの時代と

國民の經驗より、自由な勞働者によつてなされる仕事の方が奴隸によつてなされるものよりも終局に於て安くつくことが明かだと私は信ずる」とも述べている。^{*}このようにして個々の問題解決の必要の經驗から自由が昇華して觀念化され、更に次の問題解決の指導原理となつたのである。後段のみを見るとスミスはいかに理想主義者のようであるが、その場合前段の經驗主義的立場を見失わないようにしなければならぬ。

^{*} A. Smith, op. cit. p. 83, 大内譯(一)、一六一頁。

そこで封建的諸制約を排除くと、單純に無色の自由なる社會が實現せず、實際には資本主義という色のついた自由社會が現われた。そうなると勞働價值は單純な形で現われず、資本主義社會の分配によつて歪められた複雑な形をもつて現われることとなつた。そこで勞働價值の單純な形は啓蒙的自由の原始の社會に追い歸され、別に現實の複雑な形態のものを立入つて説かなければならなくなつた。第六章の問題はそれである。スミスの説明は次のように進められた。

資本主義經濟となつて資本が特定の人々の手に蓄積されると、彼等はそれを用い、勞働者を雇つて生産し、その生産物を賣却して利潤を得んとするのは自然である。即ち勞働者を雇つて生産を営むものは、その生産物を交換した結果、原料の價格と勞働者の賃金を支拂うに足る以上に、利潤として何物かが得られなければならない。それ故にこの勞働者達が原料に添加するところの價值は、二つの部分に分解する。即ち一部分は彼等の賃金を支拂い、そして他の部分は雇主が前貸したところの原料と賃金との全資本に對する利潤を支拂う。もしも彼等の生産物の賣却によつて資本を回收するにとどまり、それによつて雇主が何等うるところがないならば、彼等は勞働者を雇つて生産しないであろうし、またその利潤が資本の大きさに比例して得られなければ、小資本よりも大資本を用うることに

ついで何の興味もない筈である。そこでかかる事情のもとでは労働の全生産物は必ずしも労働者に属するとは限らない。多くの場合において彼は彼を雇うところの資本家とこれを分割しなければならぬ。またある商品の獲得または生産に通常使用される労働の量は、普通にその商品を購入し、支配し、またはそれと交換されるものの量を左右しうる唯一の事情でもない。賃金を前拂し、その労働の原料を供給したところの資本の利潤に對してもまた別に追加量が支拂われなければならぬことは明かである、とスミスは考へた。

利潤と同様の事情が地代についてもある。即ちある國の土地がすべて私有されるや否や、地主もまたすべての他の人々と同じく、彼等がかつて蔭かなかつた場所で收穫することを好み、その自然的な生産物に對してすら地代を要求する。従つて土地を利用して労働し生産するものは、生産したもの的一部分を地主に提供しなければならぬ。この部分、或はこの部分の價格は土地の地代を構成し、これは多くの商品の價格に於て第三の構成部分をなすものであると考へられた。

第十一章地代論の初めに於ける地代の説明では、地代は價值現象でなく、全く價格現象として扱われている。即ちスミスによれば地代は一種の獨占價格で、土地生産物が利潤を償う程度の普通の價格にとどまるならば地代は支拂われず、土地生産物に對する需要が増加してそれ以上の價格になるならば、この超過部分が地代となる。そこで地代は賃金及び利潤とは異つた方法で商品の價格の構成に入り込む。賃金及び利潤の高低は價格の高低の原因であるが、地代の高低はその結果である。ある特定の商品の價格に高低があるのは、その商品を市場に賣すために拂わねばならぬ賃金及び利潤に高低があるからである。しかしながら商品の價格が高い地代を生ずるか、低い地代を生ずるか、または全然地代を生じないかは、その價格の高低によるものである。即ちその價格がそれらの賃金及び利潤を支拂うに足る以上に、大いに餘るか、極めてわずかに餘るか、また全く餘らないかによるのであると説かれた。^{*}

しかし地代は土地生産物が需要の増大によつて價值以上の價格をもつことにより、この超過價格を通じて初めて地主が社會生

生産物の一部を獲得するものと考えたよりも、基本的には地主が生産物價值に對し土地使用の代償として直接に要求するものと考えたようである。地代論の長い説明の結論に於ても、各國の土地及び労働の年々の生産物の全部、それと同じことであるその年々の生産物の總價格は、自然に分れて三つの部分となることは、すでに述べた通りである、土地の地代、労働の賃金そして資本の利子これである、とも論じている。*

* A. Smith, op. cit. pp. 146—147, 大内譯(一)、二八二—二八三頁。

** A. Smith, op. cit. p. 243, 大内譯(一)、四六八頁。

更に第二篇第五章で論じているところによると、農業においては、自然も人間と共に労働する。そしてその労働は何等の費用も要しないものではないけれども、その生産物が價值をもつ點に於いては、最も經費のかかる職工の生産物と異なるところがない。そして地代はその使用を地主が農業者に貸し與えている自然そのものの右の如き力の生産物と見なさるべきものである、というのである。*この場合の價值は使用價值であるが、それにしても地代となる價值が流通、價格より生ずるよりも基本的には生産に於て形成されると考えられていることは明かである。

* A. Smith, op. cit. pp. 343—344, 大内譯(一)、一六〇頁。

もとより價格の各種の構成部分の眞實價值は、それらの構成部分各々が購ひ、または支配しうることできる労働量によつて測られる。労働はそれ自身労働に分解するところの價格部分の價值を測るばかりでなく、地代に分解する價格部分や、利潤に分解する價格部分の價值をも測るのである。要するにあらゆる社會に於て、あらゆる商品の價格は結局これら三部分のうちのいずれか一つに、またはその全部に分解せられるものである。そして進歩せる社會に於ては、これら三つが大部分の商品の價格のうちに、その構成部分として多かれ少なかれ入り込んでいゝと説かれた。*

* A. Smith, op. cit. pp. 50—52, 大内譯(一)、一〇一—一〇五頁。

商品價值が資本主義社會に於ては賃金利潤及び地代に分解することは第八章の賃金論に於ても同様に説明されている。そこで

説くところによると、労働の生産物は元來労働の自然的報酬または自然的賃金を構成する。土地の私有と資本の蓄積とに先立つ原始的状態においては、労働の全生産物はその労働者に属した。彼は共に分つべき地主も主人もたなかつた。もしもこの状態が続いたならば、労働の賃金は分業の發達に基づく生産力の非常なる改善につれて増加したであらう。すべての物品は漸次低落したのであらう。しかし労働者が彼自身の労働の生産物の全部を享受したかくの如き原始的状態は、土地の私有と資本の蓄積の最初の導入後は、長くは續かなかつた。土地が私有されると地主は労働者がその土地で生産したものについて地代という一つの分前を要求する。また資本が蓄積されると、職工は彼等の仕事の原料とその仕事が完成するまでの賃金と生活維持費とを前貸してくる雇主に、生産物のうちから利潤という分前を支拂う、というのである。*

* A. Smith, op. cit. pp. 66—67, 大内譯(一)、一〇一—一三三頁。

ここにスミスの云わんとするところは、資本が蓄積され土地が私有されている資本主義社では、生産されたる商品価値はその全部が労働者の報酬たる賃金とならず、そのうちから賃金以外に、使用されたる資本の報酬たる利潤や土地の報酬たる地代が支拂われるということである。しかし商品価値の源泉或は實體が労働であるということが否定されているわけではなく、ただ労働によつて形成された商品価値が賃金、利潤及び地代に分配されるというのである。また賃金、利潤及び地代の価値の尺度が労働であることも認められているところである。

労働の全生産物が賃金の外に利潤、地代を償わなければならぬということについて、労働の加えられる原料の価値を償うことは顧みられているが、道具、機械等の消耗される価値を償うことは顧みられていない。これはスミスが偶々忘れたためでなく、一定の見解に基くものであつた。即ち農業生産物の価値を論ずるに當り、この場合にも価値は賃金と利潤と地代に分れ、これらの三部分は直接にか、もしくは終局にか、穀物の全價格を形成するもので、農業上の用具の償却は問題とならないことを特に指摘する。農業者の資本を償却するために、または彼の家畜その他の農業上の用具の磨損を補償するために、第四部分が必要なるかの如くである。しかし農業上の一切の用具の價

格は、例えば耕馬にしても、その價格はそれ自身右の三部分から成るものと考えなければならぬから、穀物の價格は馬の價格ならびに維持費を支拂うものには相違ないが、その全價格は直接にか、または終局に於てか三部分に分解せられると考えられた。^{*}農産物について云えると同様のことは、當然に工業生産物についても云えなければならぬ。

^{*} A. Smith, op. cit. p. 52, 大内譯(一)、一〇五—一〇六頁。

しかしこれでは資本主義經濟の問題は説明できなくなる。蓋しこの理論では第一に利潤のよつて立つ資本的根據が解消し、利潤そのものも解消し、労働のみが残る。この際問題は資本と利潤を解消して労働のみを残すことなく、利潤の存在を労働によつて説明することである。

第二にこれでは生産物價值は終局に於て賃金、利潤等に解消されるから資本蓄積はなく、生産されたものは結局全部消費されることとなる。従つてこの構造で再生産を考えるならば、資本蓄積がないばかりでなく、過剰生産も存在しない。生産されたものは滞りなく全部消費され、生産と消費はつねに一致する。『國富論』冒頭の有名な文句「すべての國民の年々の労働は、本來その國民が年々消費するところのあらゆる生活の必需品と便益品とを供給する元本である、」という場合にも、生産と消費の一致が豫定されている。資本主義經濟に於ては生産されたものが滞りなく消費に移されないとともに最大の問題があるのだが、その點はスミスの看過したところであつた。そしてこの調和論は以上の價值論に深くその根を下していた。

スミスに於てこのような理論が大した無理を感じないで形成されていたのは、第一に當時資本主義經濟は形成され始めていたが、未だ大なる固定資本は使用されず、資本構成のうちに於て占めるその割合も小であり、従つて資

本が自己運動的に増殖されず、云わば生産の手段たる段階にとどまつていたこと、第二に資本主義經濟の初期であつて、惡質の過剰生産恐慌は現われず、生産を増進するならば、それは圓滑に消費に移されたことによる。しかしマルサス、リカアドの時代になると、現實のこの事情は變化し、スミスの理論ではそれを説明し得なくなり、新しい理論を必要とするに至るが、それは基本的には價值論の規定から問題となることも當然であろう。

五、價值合成論

さてスミスは商品價值が三つの部分に分解することを一般的に説いた後で、種々の商品についてその分解が多少づつ異なることを詳論した。この第六章の最後に至り、理解しにくい説明をなしている。そのいうところでは、商品にしてその交換價值が勞働のみよりなるものの數は、文明國に於ては非常に少なく、大部分の商品の價值のうちに、地代及び利潤が貢獻するところが多いのであるから、その國の年々の勞働の生産物は、その產出、精製及び市場への搬出に使用した勞働よりは遙かに多量の勞働を購ひ、または支配するに足るものに相違ない。もしその年々買ひいうるところの全勞働を、この社會が年々使用するものとするとするならば、勞働の量は毎年非常に増加するのであるから、各年の生産物は毎年毎年前年のそれに比して非常に大きい價值のものとなるであらう。しかしながら年々の生産物の全部が勤勉なる人々の維持に使われるような國はどこにもない。どこに於ても遊惰者がその大部分を消費する。そしてこれら二つの異つた階級の人々の間に年々如何なる比例にこの生産物が分たれるかに従つて、年々の全生産物の普通または平均價值が年々増大するか、減少するか、または同一であるかが定まる、というのである。*

* A. Smith, op. cit. p. 56, 大内譯(1)、113頁。

ここで注意しなければならぬのは、文明社會、即ち資本主義社會では商品價值は勞働のみによつて形成されるのではなく、利潤と地代の價值が加わるという點である。しかし、もしそうだとすると、前の説明は覆つてしまう。前の説明では商品價值を形成するものはもっぱら勞働のみで、ただそれが資本主義社會では賃金、利潤及び地代に分解するといふのであつた。しかるにここでは價值を形成するものが最初から賃金、利潤及び地代であるかの如くである。まず賃金、利潤及び地代が先在して、それが結合して商品價值が形成される如くである。前の説明から考えてこれではよいのだろうか。*

* スミスは資本主義社會に於ては、商品價值が勞働によつて決定するという見解を放棄して、専ら賃金、利潤及び地代より合成されるといふ見解をとつたという解釋は廣く行われているところである。例えば波多野鼎『價值學說史』第一卷、三一頁以下、四五頁。

高島善哉教授もこの點につき、スミスが「初めの立場から他の立場へと突然急旋回を行つた」ことを指摘し「これは鮮かな思想の轉換であるばかりでなく、明かに論理の急旋回である」と述べていられる。（同教授「アダム・スミスの市民社會體系」第六章の三）

確かにこのスミスの説明は曖昧である。もし交換價值が本來的に賃金、利潤及び地代から合成されるとすると「商品にしてその交換價值が勞働のみよりなるものの數は文明國に於ては非常に少なく、大部分の商品の價值のうちには地代及び利潤が貢獻するところが多い」云々という場合の「勞働」は「賃金」と改めなければならぬ。そしてこの説明につづいて「その國の年々の勞働の生産物は、その產出、精製及び市場への搬出に使用した勞働よりは遙かに多量の勞働を買いまたは支配するに足るものに相違ない」といふ場合にも、この「勞働の生産物」は「資本或は土地を利用した勞働の生産物」の意味であり、「……市場への搬出に使用した勞働」は勞働そのものでなく「賃

金」であろう。そしてその次の、「もしその年々買いうところの全労働を、この社會が年々使用するものとするならば、労働の量は毎年非常に増加するのであるから」云々という場合の労働は「労働力」の意味であろう。短い説明のうちに労働の概念がにこのように多義的に用いられている。

商品價值がそれを生産するに必要な労働によつて決定するということと、労働ではなくて賃金、更には利潤及び地代で決定するということは全く異なる規定である。前者は所謂投下労働價值説であるが、後者はいわば生産費説である。前者に於ては賃金、利潤及び地代は労働によつて形成されたる商品價值から派生するものであるが、後者に於ては賃金、利潤及び地代が豫め存在し、商品價值はその合成によつて形成されることとなる。前者では賃金、利潤及び地代は労働價值によつて説明されるが、後者にはこの三部分の本質を説明する理論はない。

ところで前述の如く第六章の大部分は商品價值が三部分に分解するという説明で、三部分が商品價值を合成すると考えると思われる見解は最後の十數行にとどまる。これとても用語に解釋を加えなければならぬようなものであるから、これだけならば全體として考えると労働による價值決定の原則を貫いたと見てもよいかも知れぬ。しかし次の第七章の自然價格と市場價格の説明に至ると、價值が三部分から合成されるという見解で蔽われている。

この章では労働による商品價值の決定の最初の説明とは殆ど關係なく、平均的な賃金、利潤及び地代の合成による自然價格の形成と需要供給の變動によつて決定される市場價格と兩者の關係とが説明されている。ここまできると労働による價值の規定と賃金、利潤及び地代の關係は消え失せて、平均的な賃金、利潤及び地代が本來的に商品價值を合成する如くなっている。

それではスミス價值論はどうしてこのような變化をしたのであろうか。労働價值の説明は一般に云われているよ

うに單純に哲學的、形而上學的のもでなく、一種の經驗的理論であつたことは前述した如くであるが、所謂價格が賃金、利潤及び地代等によつて動かされていることもまた吾々が日常經驗するところであり、スミスが實證的に説明せんとしたところである。しかし前者が經驗的だということと後者が經驗的だということとはやや異つてゐる。前者の經驗は云わば歴史的經驗である。中世から近代に移る人間解放の歴史的變化に於て、商品生産に於ける一般の勞働の基底が歴史的に認識された。これを前提とし、即ち自由なる資本主義社會が形成され、そのうちに於て云わば日常經驗として、商品が賣買取引されるにつき賃金、利潤及び地代の合成による自然價格の形成が認識されたのである。後者の經驗は近代科學の實證主義的精神より看過し得ないところであるが、前者の經驗は一層重要であり、この經驗を生かしたこそスミスをして經濟學の創設者たらしめた所以のものである。後者の理論は前者の理論の上に築かれているのである。後者を説くに至り前者が必要でなくなつたのであるならば、『國富論』の草稿の推敲に十年の歲月を費しているのであるから、『國富論』から必ず削除されていたであろう。實際それは削除されないのみか、精彩ある敘述となつており、且つ價值論の章については特に讀者の忍耐と注意とを求めているのであるから、極めて重要な説明でなければならぬ。

勞働による商品價值の説明と賃金、利潤及び地代の合成による説明との關係について、前者は初期未開の社會に於ける説明であり、後者は資本主義社會に於ける説明であるという風に二元論的に解釋することが從來しばしば行われたが、前述する如く前者は單純に假想の社會の説明に終つていない。原始社會を引合ひに出すのは啓蒙思想家の一特色であるが、これとても歴史的經驗の基礎を有する勞働價值の行われる場面である。

そればかりか資本主義社會も勞働價值の原則から全く遊離してゐるのでなく、むしろそれが貫いてゐる社會であ

つた。中世から解放されてゆく新しい社會では、勞働こそ富の源泉であり價值づけられるものであるが、この自由なる社會に於て自然的に發生したところの資本の蓄積と土地の私有を基礎とする資本主義的生産に於ては、資本や土地の利用が價值生産に貢獻することも認められた。しかしこれはその結果が勞働價值に添加されるものであつて、勞働による價值形成の原則は主軸として維持されていたのである。實際に初期の資本主義經濟では資本蓄積が小であるから、價值えの利潤の添加を認めても、勞働價值の原則を崩すに及ばなかつたであらう。また中世末期の窮乏から脱して新しい社會に移るときには、勞働生産力を上昇せしめ國富を増進せしめることが賃金の増加ともなつたのであるから、勞働とその報酬である賃金の關係、或は賃金と利潤との關係を立入つて追及する必要もなかつたであらう。成程スミスでは社會の富の増進は賃金を騰貴せしめるが、それは反對に利潤を低落せしめる傾向がある。賃金と利潤、勞働と資本は相對抗するかの如くである。しかしこれは同一の生産物を勞働者と資本家とが分け合ふ點より賃金の騰落が利潤の騰落と相反し對抗するのは全く異り、利潤が下落するのは賃金の騰貴とは別に資本の蓄積が増大し資本家が相互に競争するからであると考えられ、賃金と利潤の分配關係が強く考えられてはいなかつた。^{*}これらの研究は實際にそれを等閑視し得ない後の、リカードなどの時代になされたところである。それにしても勞働價值の規定をすてて、最初から商品價值が單純に賃金、利潤及び地代によつて合成されると云つただけでは、それは末梢的、現象的な説明にとどまる。

* A. Smith, op. cit. p. 89, pp. 95—96, 大内譯(一)、一七三頁、一八六—一八八頁。